

早稲田大学 文化構想学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(現代文2問、現古漢1問)
難易度	昨年より易化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「日本と中国の近代」を中心とする評論。

出典:A:竹内好『中国の近代と日本の近代』(1948年)、

B:溝口雄三『〈中国の近代〉をみる視点』(1980年)。

《本文字数:約 4200 字＝昨年より約 700 字減少。設問数:7＝昨年より1 問減少。》

小問	難易度	コメント
問一	易	【傍線部説明】第一、第二段落の内容から容易に判断できる。
問二	標準	【傍線部説明】Ⅱの第一段落の内容から判断する。「観念」＝「原理」と現実との対比をとらえる。
問三	標準	【傍線部理解】問題文の「日本とは異なる文化…」とは「中国文化」であることをとらえ、中国が「自己に固執」した表現を探す。
問四	標準	【空欄補充】a・bは直後の一文から、また、c・dは傍線3の1行前から決まる。
問五	やや易	【傍線部説明】傍線4を含む一文の主語＝2行前の「わたくしたちの中国近代観は」をとらえれば容易に判断できる。
問六	標準	【空欄補充】空欄eの1行前の「後進を自覚しない」日本との対比をとらえる。
問七	標準	【空欄補充】空欄fの5～6行後の「充足的な自己」がヒントになる。

(二) 随筆的評論文。「音と沈黙」について。出典:今福龍太『音の襲、ことばの隈』。

《本文字数:約 2000 字＝昨年より約 700 字減少。設問数:7＝昨年と同じ。》

問八	易	【脱落文挿入】脱落文が空欄ハの段落の「まとめ」であることは容易に判断できる。
問九	やや易	【理由説明】傍線Aの直後の三文より判断できる。
問十	やや難	【空欄補充】空欄Xの直前の「アコースティック」の意味(＝「電氣的に増幅していない」)を知っていたか?
問十一	やや難	【傍線部説明】傍線Bは、直前の一文の「耳を澄ます」ことにより聴こえてくる音である。ロは「対極にあって」、ハは「外部にあるはず」が誤り。
問十二	やや難	【空欄補充】空欄Xの1行前と、空欄ハの2行前の表現より判断する。
問十三	やや難	【内容合致】ロは「相互に対立する概念」、ハは「相補的」「無機物的」が誤り。
問十四	易	【漢字書き取り】「楷書ではっきり書く」という設問の条件に注意すること。

- (三) 小説。漢文。古文。出典：甲＝森鷗外『魚玄機』、乙＝『唐才子伝』巻八「魚玄機」、丙＝『唐物語』。  
 《本文字数：合計約 2600 字＝昨年より約 400 字減少。設問数：9＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問十五	やや易	【知識問題】「長恨歌」は、唐の白居易の長編叙事詩。
問十六	やや易	【文脈把握】傍線1のある段落の内容から容易に判断できる。
問十七	やや易	【文脈把握】傍線2の3行前「温は云った。」から傍線2までの内容から容易に判断できる。ホは「玄機の子女は」の部分がおかしい。
問十八	やや易	【文脈把握】傍線3の直前の漢詩の内容から判断する。「羅衣」「羨」などの表現から容易に判断できるだろう。
問十九	標準	【句形】「使」に着目。仮定形。傍線部の「使」はここでは「しメバ」と読む。
問二十	標準	【文脈把握】傍線5の直前の内容、および、傍線6の1行後から考える。
問二十一	易	【空欄補充】傍線6の直前の内容から判断する。
問二十二	やや難	【漢詩】選択肢を一つ一つ訳して判断するしかない。
問二十三	やや易	【内容一致】ロは甲の第三段落に、ホは丙の女のセリフにそれぞれ一致する。

### 〔総合コメント・今後の指針〕

すべての大問の字数が減少したものの、例年同様に時間に追われた受験生が多かったであろう。文化構想学部の国語の試験は、〈時間との闘い〉といえる。意外に時間のかかる大問一は後回しにし、先に大問二と大問三を解くこと、そして、解くのに時間のかかりそうな設問は後回しにして先に進むのが得策であろう。

また、大問三が従来の融合文から、関連する内容の小説と漢文と古文を並べて出題する形式に変わった。古文は独立問題と考えてもいいくらいであった。

大問一は、日本と中国の近代を中心とする内容の評論文。二つの関連する内容の文章を並べて出題し、両者の対応関係などを問うてくる形式は例年通りだが、例年とは異なり文語文は出題されず、二つの文章はともに現代評論であった。設問では、両者の対応をおさえて解く問三に時間をとられた受験生が多かったかもしれない。今回の文章のテーマの「近代」は高校の教科書にも採用されている入試頻出のテーマなので、多くの受験生は読むのにそれほど抵抗を感じなかったであろう。本校でも『◆早大現代文 ◆③④PART I』の〔六〕、『ハイレベル現代文／早大難関大現代文 PART I』の〔六〕、冬期講習テキスト『早大難関大現代文』の〔二〕、などで取り扱った内容である。ふだんから高校や予備校の授業で扱われる評論文をテーマという観点でもとらえておくとよい。

大問二は、「音と沈黙」についての随筆的評論。本文内容はそれほど難しくないが、問十、問十一、問十二、問十三あたりは難しい。

大問三は、関連する内容の小説と漢文と古文が並べて出題された。例年通り、文章・設問ともにそれほど難しくないのが、高得点をとる必要があるだろう。大問一で文語文を出題しなかった代わりに、森鷗外の文語文体の小説が出題された。また、古文がほぼ独立問題のように出題されたので、今後は今まで以上に古文の学習に力を入れる必要があると思われる。